

モダリティとロボットの断想

彭 国 躍

昨年、神奈川大学言語学研究叢書(2)『モダリティと言語教育』に「中国語モダリティの機能体系—Palmerモデル適用の試み」という論考を書いて以来、しばらくモダリティのことは脳裏から離れられなかった。世間でしゃべるロボットが話題になるたびに、モダリティがどのように表現されているかがどうしても気になる。

そもそもロボットは人間のようことばを理解し、使うことは可能なのだろうか。かつて言語哲学者のJohn R. Searleが*Minds, Brains, and Programs* (1980年)という論文の中で“The Chinese room”という思考実験により、みごとに人工知能と人間の言語理解との区別を立証した。Searle^{註1}は、自分がコンピュータと見立てた部屋に入り、小さな窓を通して外部から英語で書かれた質問カードを受け取った時、彼はそれを読み英語で回答を書いて窓の外に出すが、中国語で書かれたカードが差し込まれた時には、漢字が読めない彼はプログラムが書かれた作業マニュアルに従って中国語のカードを選び窓の外に返すということを想定した。部屋の外の人間から見れば、両言語とも正確な回答が得られたので、このコンピュータは英語も中国語も同じように理解できるように見える。しかし、部屋の中を覗いてみると、英語の回答はSearleがことばの意味を理解して答えているのに対して、中国語の回答はプログラムに沿って作業しただけで、ことばの内容は毛頭理

解していないことが明らかである。つまり、ロボットの作業はSearleの中国語の回答のように「ことばの理解」という人間の知能とは別物であることが証明されたわけである。

ところが、コンピュータサイエンスのパイオニアMarvin Minskyは、ある日テレビインタビューの中で“I know the philosopher you are talking about. …… I don’t have much respect for those philosophers”と、Searleの主張を一蹴した。Minsky^{註2}にとって脳はしょせん物質であり、様々なパーツによって構成された一種の機械、しかし極めて精密な機械である。科学者たちがこのような考え方をもっているからこそ人間の知能への挑戦が始まり、人工知能の技術革新が飛躍的に進歩したことは間違いない。いまは、笑うロボット、考えるロボット、しゃべるロボットなどを科学者たちが本気で作り出そうと努力している。

しかし、それでも私は、もし科学者たちの夢が実現でき、しゃべるロボットが作り出されたとしたら、主観性を表現するモダリティがどう処理されるかが気がかりでならない。たとえばロボットが「～だろうね」「そうかなあ」「まあいいか」「絶対～にちがいない」などと発話したとする。われわれはそれらを額面通りに受け止めていいのだろうか。つまり、これでロボットが推測したり、疑ったり、譲歩したり、確信したりしたことになるのだろうか。なるとすると、生命体抜きの主観的な

判断や表現とは、いったい何を意味するものだろうか。

科学者たちの執念は理解できる。それが原動力となり人間の能力を遙かに超えるマシンが開発されてきたことも事実である。しかし、だからと言ってSearleが示した生命体としての主観性（意識、理解、知覚）の壁をマシンが本当に超えられるのだろうか。われわれは人間そっくりの蠟人形を見た時、ふと動き出すのかなと錯覚を起こすことはある。ロボットの動きを見て生き物のように感じることもある。シミュレーションは実体に似ていたり、いなかったり、あるいは実体以上にスマートに出来上がったりすることもあり得る。しかし、それにはいつか必ず命が吹き込まれると熱弁されると、そうかなと疑いたくなる。それが本当に起こったら、それこそ鏡に映った自分がある日突然飛び出してくるようなファンタジーの世界

である。

最も客観的で、理性的な分析に徹する科学者たちは、実は最も可愛らしく、ファンタスティックな夢を追いかけているのではないかというような気がしてならない。

ついこの間、「神の素粒子」が発見されたという報道を耳にした時、もしかして物理学者により生命の誕生にかかわる物質が突き止められたのかなと、早合点してわくわくしたのをいまでもはっきり覚えている。

.....

注1：Searle, John. R. (1980) Minds, brains, and programs. Behavioral and Brain Sciences (3): 417-457

注2：<http://www.youtube.com/watch?v=SNWVvZi3HX8&feature=related>
